⑤ ライン鬼ごっこ

体育館に引かれた色とりどりの線を見ると，「ライン鬼ごっこ」を思い出します。これは，高鬼ごっこ，凍り鬼ごっこ，色鬼ごっこなどとたくさんある鬼ごっこの変わりバージョンの１つです。この小学生っぽい遊びを中学生にやらせたのは，昭和 50 年ころ，生駒南中学校のときのことでした。体育館に引かれたラインの上だけを走るというライン鬼ごっこで体を暖め，寒い冬の朝の学年集会を始めました。「こんなルールで鬼ごっこをやってみようか」という働きかけに素直に応じた子どもたちとの楽しい遊びでした。教師も生徒もみんなが入り乱れて体育館を走り回りました。「子どもじみたことを」とお考えになるかもしれません。しかし，彼らと彼女たち，そして私たちも真剣でした。

「あんな奴，何しとんねん。あほかいな」

そんな冷やかな見方で隅っこにくすぶっているという生徒は１人もいませんでした。たとえ，そんなふうに思う生徒がいても，一人前の大人である教師もいっしょに走り回って遊ぶこの時間，そんな行動が取れなかったのでしょう。最近，こうした子どもが減ってきたように思います。中学生だけではありません。小学生でさえ，妙に大人じみた考えをもち，行動をするような気がするのです。大人でも，時には子どもじみた遊びをしてみてもいいではありませんか。

この学年，何事にも付き合いのよい学年でした。まとまりのある学年でした。教師間もそうでしたし，教師と生徒の間にも温かい人間関係がありました。もちろん温かいだけだったのではありません。この温かみを生かした厳しい指導がありました。いっしょに遊ぶ，いっしょに遊んでもらえる，そんな親しい間柄の中でも教師の権威は失われ

ていませんでした。それは，権力ではない，互いの信頼感の中から生まれてくるものでした。教師も生徒も人間としての等しい権利をもっています。しかし，「教育は，人格の完成をめざし…」と教育基本法にあるとおり，児童生徒は未完成なのです。だから，そこには教える者，導く者としての指導者が必要なのです。指導者として一目おかれる存在，それが教師なのです。その「一目」を生み出すもの，それが権威だと思います。いっしょに遊ぶ，そんなときにも，指導者としての自分，教師としての自分を失ってはならないのです。「だれがせいとかせんせいか…」のめだかの学校であってはならないし，「むちをふりふりチーパッパ…」のスズメの学校でもない，先達として尊敬され，師として教えを請われ，時にはいっしょに遊ぶことのできる存在でなければならないと思います。それが教師というものであることを生徒に認めさせ，保護者や地域に理解してもらうことが大切です。こんな共通理解の上に立っての楽しい学校生活は昭和 55 年に終わりました。以後の 16 年を教育委員会職員として，校長として過ごすことになったのです。

さて，この生駒南中学校に，私が勤務することになったのは昭和 39 年のこと，1 学年 2 クラスというこじんまりした学校でした。教員数も少なく，担任 2 人と副担任 1 人で学年を構成していました。しかし，周辺に新しい住宅地が開発され，生徒数がしだいに増えていきました。昭和 46 年の市政施行のころには毎年 1～2 学級の増が続き，後には 5 クラスの学年が生まれました。学校数の増加も著しく，3 つの中学校が分離を繰り返して 8 校に増え，4 校だった小学校は 12 校になりました。県内でも目をみはるほどの学校増，学級増で，新規採用の先生が配置され，市内には若い先生が増えました。元気な若い先生が増えることによって活気が出てきましたし，新しい発想が生まれました。人

数が増えることによって分掌する校務の種類は減り，「あれもこれも」から「これだけをきっちり」に変わってきました。割り当てられた仕事を，ゆとりをもってできるようになった反面，担当以外の仕事は分かりにくくなりました。

また，どんどん新しいメンバーが加わっていく，それも経験の浅いメンバーであるということから生じる問題もありました。学校行事の企画・実施もそうでした。昨年の反省に基づいて，新しい工夫を加えてより良いものにしていこうとしても，まずその行事の理解に時間がかかります。ですから今年は見ておいてもらって，来年から動いてもらおうということもありました。生徒への連絡や指導はその仕事に精通したものがあたることになります。適切な指導をしていくために学年グループの中での役割分担が必要になったのです。こんなことをきっかけに前述の学年集会を開くようになりました。元気に朝のあいさつを交わし，担当者の話を聞きました。このときには初任者にも担当させ積極的に参加してもらいました。あれもこれもではなく，「これは先生に任せておくよ」が若い先生のやる気を育ててくれました。

「あの話をするときの題材が良かったね」

「あの話のまとめはあれで良かっただろうか。こちらの意図が十分に伝わっただろうか」

互いのこんな話し合いが，話の仕方を考えさせ，指導法の改善に役立ちました。

私が，初めて勤務した山の学校は全職員で 9 人，ここでは 50 代にお入りになったばかりの校長先生，40 代の先輩にお父さん役を頼み，新卒の私たちは気軽に悩みごとを相談できるお兄ちゃん役を務めていたように思います。少人数の分校に勤務していたW先生は子どもたちの友達役も務めていました。先生が子どもにならないといけないと

きもあったのです。若い者，経験豊かな者がそれぞれの特性を発揮し，いろいろな役割を果たしていました。それと同じことが 1 つの学年集団の中で行われていたのです。

先生のこなす役割はいろいろです。「先生は学者でなければならない，芸者も務めなければならない，易者になることが必要なときもあるし，医者にならなければならないときもある」こんな話を聞いたことを思い出します。こんな多様な仕事を，それぞれの個性・特性を生かして，年齢に応じて受け持っていたのです。

高齢化社会という言葉が聞かれます。それは学校内でも同じことです。教員の高齢化が進み，児童や生徒との年齢差が大きくなっています。若い先生が足りなくなってきています。教員数が児童生徒の数によって算出されるのはやむを得ないことですが，そんな中で，現状の定数を確保するだけでなく，将来の教育への投資だという考え方で，若い人たちを学校に迎える施策を行政当局にお願いしたいと思います。

国家 100 年の大計としての教育です。「あのとき採用を手控えていたことのつけが今やって来た」では困るのです。児童生徒の数に基づいて学級が編制され，これに見合う教員が配置される，そして，それ以上の教員を置くことはできないのは分かりますが，「児童生徒の数が減っている今だからこそ少人数学級に」とか「1 人 1 人を育てるための取り組みに対する教員の加配を」「カウンセリングのための加配を」などいろいろな方策を考えてほしいと思います。

そして，文部科学省や教育委員会が打ち出す教育の将来像を見据えた投資に，納税者である皆さんの理解を頂きたいと思います。教育は，年度ごとの収支決算といったような方法では成果が測れないのです。す。